



コンピュータを利用した私のアイヌ語研究

ミハウ・プタシンスキ

ピウスツキのアイヌ語研究

2019年には日本ポーランド国交樹立100周年を迎えた。この出来事の背景にはいくつもの変数が働いているが、不可欠な歯車の一つは、ブロンスワフ・ピウスツキ氏の日本における活躍であった。ただし、サハリン・北海道に滞在する間にピウスツキは決して政治や外交を中心に活動をしたわけではない。北海道の先住民であるアイヌのユニークな文化と言語を研究し、その魅力を理解し、絶対にこの文化と言語を世界に普及させ保存したいという気持ちでアイヌの親しい友となったのだ。

ピウスツキの他にもアイヌ語を研究した偉大な研究者がいた。英国聖公会宣教師ジョン・バチェラー、日本の言語学者金田一京助、それぞれのアイヌ文化・言語研究と維持への貢献は否定できない。

しかし、ピウスツキの研究活動には目立ったところがある。彼はその時代の最新技術である蠟管を用いてアイヌ語を初めて音声メディアに録音し、次世代のために保存してくれたのだ。100年後に生のアイヌ語がどれだけ珍しい、希少なものになるか、当時ピウスツキが知っていたはずはないが、研究者としての勤に導かれて、その研究に必死で飛び込んだのである。

ピウスツキのあとを継いで

私がアイヌ語、ピウスツキの活躍について知ったのは2001年頃、大学に入学したときである。日本という遙か遠い国で、人類における言語誕生の秘密の鍵を握るとも言われる孤立言語 (language isolate) であるアイヌ語を初めて最新技術を用いて研究したのはポーランド人だったとは一その意識を心に抱え、誇りと自己卑下の混ざった気持ちで大学時代を送った。その後、言語学を修め、人工知能・自然言語処理技術で学位を取得することとなり、さあようやく世界の役に立てたいと思った時、当時私が特別研究員として在籍していた北海学園大学の桃内佳雄教授がアイヌ語の研究をされているのを見てピウスツキを思い出した。

やらなきゃー最初は少しずつ踏み込み、あっという間にはまっていた。アイヌ語の維持に、ピウスツ

キほどは貢献ができないかもしれないが、彼と同じように現代の最新技術である人工知能と自然言語処理の手法を用いてアイヌ語の保存・維持・復興に貢献し、そしてアイヌ語について研究を続けている研究者の役に立ちたいと思った。

表1 文法情報付与（形態素解析）機能のコンピュータプログラムの出力の例

Sentence: Ci nukar wa ci eramesinne pet esoro hosippa as .	
Translation: When I saw this I was relieved and came back with the river current.	
Vertical output	
ci	人称接辞, 意味:私(たち) [I/we]
nukar	他動詞, 意味:見る [see]
wa	接続助詞, 意味:て [conj.]
ci	人称接辞, 意味:私(たち) [I/we]
eramesinne	他動詞, 意味:安心する [be relieved]
pet	名詞, 意味:川 [river]
esoro	他動詞, 意味:沿うて下る [swim down with the current]
hosippa	自動詞, 意味:戻る [come back]
as	人称接辞, 意味:私(たち) [I/we]
Horizontal output	
ci nukar wa ci eramesinne pet esoro hosippa as .	
人称接辞 他動詞 接続助詞 人称接辞 他動詞 名詞 他動詞 自動詞	
人称接辞 ビリオド	
私(たち) 見る て 私(たち) 安心する 川 沿うて下る 戻る 私(たち) .	

研究開発の進展

そのためには、まずアイヌ語の文法(名詞、動詞などの形態素)を自動的にコンピュータで解析できるプログラムを作成した。その後、後輩で友人のカロル・ノヴァコフスキさんとアイヌ語の大規模な言語資源(音声・テキストのコレクション)を収集し、これに文法情報を付与した(表1)。

現在は、そのデータをさらに活用して、手書きの形で残されているアイヌ語の文書から自動的な文字認識、そして音声形式で残されているアイヌ語



図1.ペッパーロボットとアイヌ語で話す筆者

の歌の朗読や会話を自動文字起こしに応用する予定である。その技術のショーケースとして、SoftBank のペッパーロボットにアイヌ語を話す機能を載せ(図1)*、さらなる発展を考えている。

ピウスツキのアイヌ語の維持への貢献を記念し、彼が残した遺産を称揚するための一番の方法は、

彼の銅像を立てることではなく、彼と同様の方針で彼の研究を続けること、つまり、ピウスツキと同じように、今の時代の最新技術を用いてアイヌ語を研究し、アイヌ語・アイヌ文化の維持と復興をより容易にすることこそが今の私の責務だと信じている。

(Michal Ptaszynski, 北見工業大学准教授)

今秋のアマレヤ劇団北海道公演の計画

丸山 博

紋別、白老(ウポポイ)でも公演

今秋もアマレヤ劇団 Amareya Theatre & Guests は、ポーランド文化・国家遺産省の競争的資金を獲得し、アイヌ女性や東京の舞踏家との共演のため来日する予定です。

北海道には11月1～30日まで一か月間滞在し、紋別、白老、札幌の三カ所で、新作「アイヌとカムイのためのレクイエム」の公演を行うほか、ベアタ・ソスノフスカ Beata Sosnowska の歴史漫画「ムーヴィ・オーエヌエヌア Mówi ONNA」のワークショップ、カタジナ・パストウシヤク Katarzyna Pastuszek、ナタリア・ヒリンスカ Natalia Chylińska、アレクサンドラ・シリヴィンスカ Aleksandra Śliwińska らによるストーリーテリングのワークショップや、ポーランドのフィジカル・シアター・アーティストの方法論に関する演劇ワークショップなども予定しています。

2017年以来4回目の来道で、毎回新作の公演に挑戦するところにアマレヤ劇団の知性と志の高さを感じます。



図1. ムックリ(口琴)を奏でるナタリア・ヒリンスカ, 2021. 7.28, 撮影カロリーナ・ユージュウィアク Karolina Jużwiak

それはまた、プログラムを講演だけに限定せず、毎回異なる研究者や他のジャンルのアーティストとのワークショップを開催することなどからも窺えます。一昨年はマンガ博物館副館長のカタジナ・ノヴァク Katarzyna Nowak とワルシャワ大学ポーランド文化研究所のアガタ・ハウプニク Agata Chałupnik 博士を東京に同行しました。

去年はコロナ禍で日本政府の入国許可が得られず、残念ながらオンラインでのウェビナーや公演となりましたが、ウェビナーには元ポーランド駐日大使ヤドヴィガ・ロドヴィッチ=チェホフスカ Jadwiga Rodowicz-Czechowska 博士らを招きました。



マルチメディア・アーティスト ベアタ

今年アマレヤとともに来道するベアタ・ソスノフスカは、詩、ヴィジュアルアート、映像制作などさまざまなジャンルで活躍するマルチメディア・アーティストです。ベアタは、2018年のポーランド女性の投票権獲得100周年を記念する展覧会でポーランドの女性活動家の肖像画を作成し、それらの中にはユゼフ・ピウスツキ Józef Piłsudski の妻アレクサンドラ Aleksandra Piłsudska の肖像画もありました。今回はアイヌの権利回復のために闘う長老に敬意を表し、その肖像画に挑戦すると聞いています。

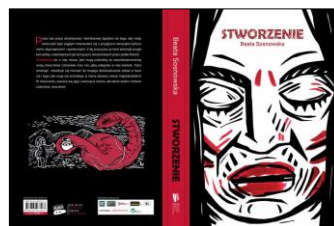


図2. 『クリエイション Stworzenie』ベアタ・ソスノフスカ著, 2020

今年も日本政府の入国許可が得られるかは不明で、現在の対応を見る限り楽観的にはなれませんので、万一のためにプラン B も用意しています。

幸いにして、もし来道できれば、彼女たちはみなさまとの交流も楽しみにしています。今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

(まるやま・ひろし、環境とマイノリティ政策研究センター Centre for Environmental and Minority Policy Studies: CEMiPoS 所長)